

7月、第77代イギリス首相にボリス・ジョンソン(55)が就任しました。ジャーナリスト、下院議員、ロンドン市長、外相などを経て、テリーザ・メイの後任に就きました。

政治家は姓で呼ばれるのが慣例ですが、第77代だけはマスメディアまでも「ボリス」と名で呼びます。人種差別的な発言や排外的なコメントなど問題発言も多い一方で、振る舞いや存在感がどこかコメディアンのように、笑われ、半ば愛されながら、公私にわたり格好の風刺の対象

## 【ボリス・ジョンソン】



ロイター

## 戦略的な無頓着？

となり続けています。

ぼさぼさの金髪に、大きな体をオーバーサイズ気味のスーツに包み、前ボタンも留めずに乱雑に着る「シャンブル・シック(不格好なおしゃれの意)」の代表格。でも、首相の座が近づいてきた頃から少し痩せ、スーツの着こなしも若干、洗練されてきました。2度の離婚を経た後の現在のパートナーの貢献

ともややかれます。とは

いえ、野放図に見える髪形や装いの印象はほぼ変わりません。

道化にも見える彼ですが、実は欧州委員会の職員だった父と画家である母を両親に持つ裕福な家に生まれ、名門イートン校を出てオックスフォード大に学んだ超エリート。卒業後も、内実はいろいろあるとはいえ、前

Style  
アイコン

述のように着々とキャリアを築き上げていたキレ者です。

ポリスの伝記を書いたソニア・パーネルによれば、前妻の父はポリスについて「意図的にだらしなくしている」と語っています。無頓着すぎる見た目は、英国上流階級特有の「媚びる必要はない」という余裕の証し。と同時に、周囲に「不格好な」自分を嘲笑させ、油断させ、嫉妬を避け、その隙に「冗談だろう」と言われながらも狙いを確実に実現していくための戦略と見たほうがよさそうです。

ジャーナリストだった彼は、元英国首相チャーチルの伝記「チャーチル・ファクター」も書いています。副題は「ひとりの男がいかにして歴史を作ったのか」。チャーチルも水玉のボウタイに毒舌といった、見た目と振る舞いによる心理操作が巧みでした。隙だらけの外見と言動は、歴史を作りたい天才的策謀家のカムフラージュ？ 無礼とジョークの際どい境界線上をいく言動で、英国の未来も予測不能の様相です。

(エッセイスト 中野香織)